

## B-70 同一視野内に明るい光源のある場合の色 変調と色疲労

岐阜大 中野みち哉

1. 目的 ある色を固視した場合，その色が次第に退色していくことは退色疲労としてすでに衆知のことであるが，本実験では，特にこの場合，明るい光源の視野内における位置の影響を主体として実験を試みた。このことは実際の照明条件を考えた場合通常起こり得ることであり，こうした場合の色の見え方というものは如何に変化するかを解決する一つの基礎資料となるものと思うからである。又実際上の色の見え方を考える場合にこうした網膜の各部位への刺激のあり方が中心視，色覚に如何に影響を及ぼすかを解決するためにも意義あることと考えて本実験を企画したのでここに報告する。

2. 方法 (1)縦50cm横40cmの背景面の中心より眩輝光が出るように穴をあけこれに拡散板をつけ光が一様に拡散するようにした。(2)背景面の照明は被験者頭上より45°の投射角により照明した。照度の変化は光源と背景面の距離の変化によって行なった。

3. 成果 (1)網膜に眩輝光源が刺激として存在する場合，眩輝光源なしの場合に比較して退色時間は短縮する。(2)照度は55°LXがよい，低照度では照度不足のため，高照度では明るすぎるための眩ぶしさの影響が現われ退色時間は短縮する。(3)照明光源が白熱灯，眩輝光源が昼光色の場合補色的な関係にあって退色時間が最も延長する。